

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「新出多言語資料からみた敦煌の社会」（平成26年度第1回研究会）

日時：平成26年4月12日（土曜日）午後13時30分より午後18時

平成26年4月13日（日曜日）午前10時30分より午後17時

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304号室

報告者名（所属）：

4/12（土）

1）松井太（AA研共同研究員，弘前大学）・荒川慎太郎（AA研）

「プロジェクト全体の目標について」

本研究課題（「敦煌プロ」）の発足に至るまでの経緯を説明した。また、3年間の研究期間中の達成目標について確認するとともに、本研究課題における活動を支えるための科学研究費や外部助成の申請について、メンバー相互の連携を進めることを確認した。

2）坂尻彰宏（AA研共同研究員，大阪大学）

「2010～2013年敦煌冬期調査について：（附）ギメ東洋美術館図書室所蔵ペリオ探検隊関係写真資料簡報」

まず、過去4年間におこなわれた冬期の中国・莫高窟（敦煌）、榆林窟（瓜州）などでの石窟調査の概要と展望について説明した。調査年度は2010年から2013年にかけての4年間である。各年とも12月末の厳冬期に訪問している。また、調査に参加したメンバー（坂尻を含む7名）とその役割、調査石窟の数量、敦煌の受け入れ先の情報を説明した。冬期調査の利点と欠点を述べ、今後の調査に向けての課題を指摘した。

つぎに、坂尻がフランス・パリ・ギメ東洋美術館図書室でおこなったペリオ探検隊関係の写真資料調査の結果について簡単に報告した。ギメ東洋美術館図書室のペリオ探検隊関係写真は、基本的に探検旅行中のプライベートな風景スナップ写真や記念写真が大半を占めている。その一方で、石窟やそこに書かれた銘文の写真はあまり含まれていない。したがって、この資料から銘文研究のために有用な情報を得ることは難しい状況である。

3）荒川慎太郎（AA研）

「西夏文題記に見られる言語特徴」

中国甘粛省には、敦煌研究院などに所蔵される西夏文文献と、石窟寺院の題記に大別される西夏語資料が残る。題記は、歴史学・仏教学上貴重な資料であるが、西夏語学においても重要な役割を占める。現存する西夏文は大半が仏典であり、しかも漢語やチベット語仏典からの重訳であるから、西夏語の口語資料と見做しがたい。一方題記には口語的な表現

も多々観察できる。本報告では西夏文題記を材料とし、その言語特徴のいくつかを紹介した。

4) 松井太 (AA 研共同研究員, 弘前大学)

「敦煌諸石窟のウイグル語・モンゴル語題記銘文」

主要な先行研究, また標題銘文資料の解読から導かれる歴史的背景について, 報告者の既刊行成果をまとめるとともに, 未発表銘文の内容から推定される諸問題を提示した。

5) 全員

近年の研究に関する情報交換。本研究課題に関する総括などが行われた。

4/13 (日)

1) 佐藤貴保 (AA 研共同研究員, 盛岡大学)

「2013 年敦煌調査について: 西夏関係」

本報告では, まず 2013 年に実施した莫高窟での西夏文題記調査の概要を述べ, ペリオが存在するとしていた (後に中国から発表された題記録文集には紹介されていない) 石窟のうち, 新たに 5 窟に実際に西夏文題記が存在することを指摘した。次に, 莫高窟第 340 窟の西夏文題記に, カラホト出土文献にみられない改行擡頭表現があり, 高位の人物のために石窟が修造された可能性があることを明らかにした。最後に, 題記に記された西夏人の人名を蒐集し, その人名の由来を分析することによって, 西夏と諸地域との人的・文化的交流を解明できるのではないかと今後の展望を述べた。

2) 赤木崇敏 (AA 研共同研究員, 大阪大学)

「曹氏帰義軍時代の敦煌石窟と供養人像」

2006~2013 年間に行った敦煌石窟 (莫高窟・榆林窟・西千仏洞) の調査の成果 報告を行った。調査対象としたのは, 曹氏帰義軍時代 (10~11 世紀前半) に開鑿・重修された石窟に描かれた供養人像である。これら供養人像は題記が無いために人物を特定できないものが多いが, 供養人像の絵画的特徴から曹氏節度使及び夫人を特定し, その分布状況を示した。

3) 岩本篤志 (AA 研共同研究員, 立正大学)

「敦煌医薬術数文献研究の現在」

敦煌漢文文献の医術および占術文献は, 基本的に陰陽五行および天人合一といった理念からなりたつ世界観・身体観を有しており, 近年用いられるようになった「術数文献」というカテゴリでくくることができる。ただ, これまでの研究史では医薬文献とそれ以外の術

数文献は研究者層が異なってきたので、ここでは「医薬術数文献」とよぶことにして、各分野の研究史の概観、問題点、今後の展望などについて述べた。

4) 岩尾一史 (AA 研共同研究員, 神戸市外国語大学)

「ギメ美術館所蔵ペリオ探検隊写真予備調査」

ギメ美術館 (パリ) 所蔵のペリオ探検隊撮影写真の調査を行ったので、その内容の報告を行った。同館の写真部所蔵ペリオ探検隊写真 (Charles Nouette 写真技師撮影) は 1524 点あり、すでに全点がデジタル画像化されている。これらは二年以内に web で公開される予定であるがそれらは低画質版であり、高画質版は同館に行って閲覧する必要がある。本報告ではこれら写真が莫高窟銘文や壁画研究に十分使用できることを、幾つかの実例とともに説明した。

あわせて、報告者がこれまで行ってきた莫高窟・榆林窟チベット銘文調査とその成果について紹介し、それら銘文の特徴として吐蕃期よりも吐蕃期以降のものが圧倒的に多く、また両者ともに非チベット人が書き手であることを説明した。特にウイグル・西夏地域から巡礼にやってきた非チベット人がチベット語で銘文を残す例が多く、その歴史的背景を明らかにすることが今後の課題であること、研究の方法として (1) 西夏におけるチベット仏教の広がりや研究する、(2) モンゴル期以前、チベット人たちが河西以北における布教をどのように行ったのかチベット文献から探る、の 2 点を提案した。

5) 山本明志 (AA 研共同研究員, 大阪国際大学)

「モンゴル期の敦煌とチベットをめぐる研究状況」

まず、モンゴル時代の敦煌をめぐる歴史的状況について先行研究を整理し、特にモンゴル皇族と沙州との関係について、現段階で判明している知見をまとめた。続いて、モンゴル期におけるチベットと河西地方をめぐる研究状況を紹介します。今後の研究の展開のための、いくつかのアプローチについて私見を提示した。

6) 橘堂晃一 (AA 研共同研究員, 龍谷大学)

「敦煌出土のウイグル語仏典をめぐる研究状況」

まず敦煌莫高窟出土ウイグル語仏典の研究状況を概観し、今後の課題として北区のペリオ将来資料と新出土資料を照合する必要性を指摘した。また、B464 窟 (ペリオ 181 窟) の壁画と題記の仏教テキストとしての重要性とともに、モンゴル時代のウイグル仏教におけるチベット仏教の影響を分析する上で貴重な情報を提供することを確認した。

7) 白玉冬 (AA 研共同研究員, 大阪大学)

「沙州ウイグルについての研究紹介」

先に沙州ウイグルに関する基本史料を紹介して、今までの研究史をまとめた。次に日中学

界間における「沙州ウイグル」をめぐる見解の違いに関しては、中国国内で独立した「沙州ウイグル王国」説が有力視されている内因を挙げて検討をした。そして、沙州ウイグルに関係する朝貢史料をあげて、これからの研究予定あるいは研究可能な点について紹介した。最後に、敦煌地方で調査しているウイグル文字銘文が根本的な史料になることを再度確認した。

8) 全員

本年度に予定する研究会の日程、あわせてメンバー共同で実施する海外調査などについて協議した。